

関東支部

# 業界の未来を担う「xミドル(クロスミドル)」始動

## — 業界を変える推進力へ、試行錯誤を通じた成長の場

### ミドル世代による共創の場

関東支部のワーキンググループ「xミドル(クロスミドル)」は、2026年3月に第一回キックオフを迎えました。本ワーキンググループは、業界の転換期を担うミドル世代(30代後半から40代)の成長と、業界全体の変革を視野に入れた取り組みとして立ち上がりました。活動は始まったばかりで、あらかじめ完成された形があるわけではありません。参加者一人ひとりが試行錯誤を重ねながら、「あるべき姿」を共に作り上げていく挑戦の場です。

### なぜミドル世代に注目するのか

業界は今、大きな転換点を迎えています。ChatGPTの登場以降、AI技術の進展が加速し、SDx(Software-Defined Everything)に代表される新たな産業構造への対応が求められる一方で、従来の組み込み技術者のスキルセットの陳腐化リスク、業界内のサイロ化による企業間人材交流の停滞、さらには世代間での知見や経験の断絶といった課題も顕在化しています。

こうした状況の中で、ミドル世代は、単なる中間管理職ではなく、経営層と現場をつなぎ、新しい産業構造を理解し、それを組織内で実装へと導く推進力となり得る存在です。

「xミドル」という名称には、そうしたミドル世代が企業や立場を超えて「クロス(共創)」し、自社だけではできないことに挑戦していくという思いが込められています。利害関係に縛られない関係性の中で知見を持ち寄り、単独では解

**図1 xミドル(クロスミドル)の目指す姿**

xミドルは、JASAの在り方を見据えながら、キャリアパス、営業、採用といった各社共通のテーマについて、課題を共有できる(悩みを吐き出せる)関係性を基盤に、有識者の知見と多角的な視点を取り入れ、自社でできないことにも挑戦し、解決の糸口を見出していくミドル層による共創・実践のワーキンググループである。

決が難しい課題に向き合う。その中心を担うのがミドル世代である、という考え方です。xミドルは、ミドル世代こそが業界変革の担い手であるという認識のもとに生まれました。

### 参加企画型の新しい活動スタイル

xミドルの特徴は、参加者が「受け身」ではなく、「企画者」として関わる点にあります。第一回キックオフでは、合意形成手法を用い、メンバー全員でワーキンググループの目指す姿を言語化しました。ブレインストーミングからキーワードの整理、作文化に至るまで、参加者自身が議論を重ねながら方向性を形づくっています(図1)。

### 課題を共有し、多角的な視点で向き合う

xミドルでは、キャリアパス、営業、採用といった各社共通のテーマについて、課題を率直に共有できる関係性を基盤としています。利害関係のない仲間たちとともに、有識者の知見や多角的な視点を取り入れながら、自社だけでは解決が難しい課題に挑戦していきます。

活動は隔月・第2月曜日に開催予定で、座学とワークショップを組み合わせた構成を想定し

**図2 関東支部 xミドル**

**目標**

- STEP 03 企業を担う
- STEP 02 成長を促す
- STEP 01 経験と自信の形成

**活動概要**

項目	内容
開催期間	1~2月に1回
実施形式	対面 企業横断的小グループ(3~5名/グループ程度)
テーマ例	組織改革、職歴思考、未来構想、オープンパッションなど
開催	各回120分/150分
参加の場	企業横断：2回目以降の回をテーマで実施するが先決事項は決める テーマ別：新卒・ワークライフ グループでの実務的な討議・議論の結果 ・自己・他社への成長 ・異業種交流プラットフォームの作成
成果物	

参加しているみんなで育て  
仲間と未来と一緒に考えていくそんな活動を目指しています

ています。各回では、参加者が自社の課題や将来を見据えたテーマを持ち寄り、企業横断の小グループで実務的な検討を行います。その中で得られた気づきや視点を、それぞれの企業へと還元していきます。

### 「育成」ではなく、「成長の気づきを与え続ける」

xミドルが目指すのは、正解を教える「育成」ではありません。試行錯誤を通じて成長のきっかけを得る場です。立場や専門を越えた対話の中で互いに刺激を与え、失敗を含めた試行を許容しながら、プロセスそのものに価値を見出していきます。

xミドルはまだ始まったばかりです。1年目は、参加者一人ひとりが企業や立場を越えた対話と実践を通じて、経験と自信を築くことを目指します(図2)。そうした積み重ねの中で、xミドルの姿は少しずつ形づくられていきます。これらの取り組みは、やがて業界全体の競争力強化へとつながっていくでしょう。その第一歩として、xミドルは今、動き始めています。

関東支部

## セミナー実施報告：第2回・第3回勉強会

関東支部では、株式会社アーキット代表の堀内浩二様を講師にお迎えし、2026年2月と3月の2ヶ月にわたり勉強会を開催いたしました。

### ■第2回勉強会「相談される為には」

開催日時：2026年2月20日(金) 15:00~17:00  
当日はエンジニアや管理・営業など多様な部門から26名の参加があり、他社交流を重視したグループワークを実施しました。「抱える課題に他社はどう対応しているか」をテーマに活

発に議論され、講師による「相談される人の特徴」の解説は、初めて部下を持つ参加者を中心に「実務に直結する」と大変好評でした。

### ■第3回勉強会「提案する力」

開催日時：2026年3月13日(金) 15:00~17:00  
参加者26名のうち過半数が前回からの継続であったため、グループワークではさらに深く白熱した議論が展開されました。「相談を受けた際の提案」というテーマに対し、若手からは「傾聴の重要性に気付けた」、ベテランから



は「自身の視野の狭さを再認識した」との声が寄せられ、キャリアを問わず多くの気づきを得られる場となりました。

各回、セミナー終了後に懇親会を行い、職種やグループの枠を越えた積極的な情報交換が行われ、参加者同士の親睦を深める有意義な場となりました。

2026年1月22日(木)に、近畿支部では「関西IT関連8団体合同 賀詞交歓会」を開催しました。

本会は、JASA近畿支部をはじめ、JISA、WAKASA、KCA、HISCO、Ruby協、SP21、KEISの関西IT関連8団体合同で開催されました。今回は全体で102社・176名、JASAからは19社・33名の皆様にご参加いただき、会場は新年の熱気に包まれました。

第1部の講演会では、独立行政法人情報処理推進機構 (IPA) デジタルアーキテクチャ・デザインセンター情報分析官であり、Open Data Spaces最高設計責任者を務める津田通隆様にご登壇いただきました。「データに飲み込まれる世界の産業戦略とデータスペースの実装に向けて」と題したご講演では、デジタル関連取支において国外への支払超過となる「デジタル赤字」の背景にある構造問題や、その打破に向けた戦略につ

いて深く切り込んでいただきました。さらに、AI時代におけるデータスペースの国際的な相互運用性確保に向けた技術仕様の設計統括や、国際交渉、標準化活動、データスペースの社会実装と商用利用に向けた産業政策などについて、現場の最前線に立つ立場から大変示唆に富むお話をいただきました。

続く第2部の賀詞交歓会は、参加者同士の親睦を深める熱気あふれる歓談の場となりました。普段は顔を合わせる機会の少ない8団体の皆様が組織の枠を超えて交流し、会場の各所では名刺交換や情報交換が活発に行われました。参加された皆様からは、「日頃一堂に会することがない様々な団体の方々と交



流できて非常に良かった」「効率的に多くの方と名刺交換やご挨拶ができた」といった喜びのお声を多数伺うことができ、本企画が大変好評であったことがうかがえました。

団体間の垣根を越えた連携が深まり、関西のIT産業全体のさらなる発展と飛躍を予感させる、非常に有意義な賀詞交歓会となりました。ご参加いただいた皆様、ならびに開催にご尽力いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

## 国内視察 実施報告 ナノテラス&アルプスアルパイン訪問

国内視察として、宮城県に拠点を置く次世代放射光施設「NanoTerasu」と、世界的電子部品メーカーの開発拠点「アルプスアルパイン 仙台開発センター」を訪問しました。

### ナノテラス訪問

「NanoTerasu」は、ナノレベルの構造解析を可能にする次世代放射光施設です。



国の主体である量子科学技術研究開発機構 (QST)・高輝度光科学研究センター (JASRI)と、宮城県・仙台市・東北大学・東北経済連合会・光科学イノベーションセンター (PhoSIC)が一体となった「官民地域パートナーシップ」と呼ばれる運営体制は、非常に革新的であると感じました。

施設内では、医薬品・半導体・素材など、幅広い分野の研究が進められています。特に微細構造の可視化によって製品開発のスピードと精度が飛躍的に向上する可能性は、製造業にとって大きな追い風になると感じました。また、スタートアップや地方企業にも門戸が開かれている点は、地域発イノベーションの創出という観点でも非常に重要と感じました。

### アルプスアルパイン訪問

「アルプスアルパイン 仙台開発センター」は、車載機器やセンサー技術で世界をリードする同社の中核開発拠点です。

エントランスに足を踏み入れた瞬間に目に飛び込んでくるのは、自社製品であるスイッチで構成された巨大な世界地図のアート作品です。さらに、広大なワンフロアには大きな吹き抜けと多様な作業スペースが配置されており、集中して研究に没頭できるブースがある一方、自然な動線で人々が出会い、何気ない会話から新たな発想が生まれるような創造性を促す空間であると感じました。

今回の視察を通じて、アプローチは異なりながらも、「東北を舞台に、イノベーションを創出する」という強い意志を感じました。

大企業だけでなく、大学や自治体、スタートアップが垣根を越えて関わることで、地方創生が加速し、新たな価値を生み出す基盤が形成されていることを実感しました。東北が持つ可能性を改めて認識する、非常に有意義な機会となりました。



## 「開発に必要な生成AI」開催報告 ～165名の申し込みを集めたセミナー～

2026年2月4日(水)・5日(木)の2日間、東芝情報システム株式会社の三島隆司氏を講師に迎え、オンライン講座「開発に必要な生成AI」を開催しました。

本講座はJASA会員企業向けの無料セミナーとして実施され、165名の申し込みがありました。これは、教育研修コンテンツ事業推進委員会(以下、本委員会)がこれまでに企画・開催してきたセミナーの中で、最多の申し込み人数となります。

本セミナーを通じて、会員企業の皆様の「生成AI」への関心の高さが改めて示されました。

### セミナー概要

アジェンダ	
01 生成AIの基本	
02 生成AIの活用	1日目
03 ローカルLLMの必要性	
04 ローカルLLMの活用	
05 フィジカルAIと今後の展望	2日目

セミナーは2日間構成で実施しました。以下、アジェンダです。

1日目：生成AIの基本、生成AIの活用

2日目：ローカルLLMの必要性、ローカルLLMの活用、フィジカルAIと今後の展望

1日目は普段生成AIを使っている人も「知識がない」「意識していない」ことを想定して説明しています。生成AIは仕組み・特徴を知った上で使うのとそうではないのでは結果が大きく異なります。

2日目は業界で注力されているローカルLLMについて主として説明しています。また、最近注力されているフィジカルAIについても概要レベルについて触れられています。

### アンケート等結果

アンケートは複数回答形式で実施しており、「AIの情報収集」「生成AIに対する学習目的」といった基礎理解を目的とした回答が多く見られました。

一方で、「今後取り組むためのヒントを取得」や「他社との比較をしたい」といった回答も併せて選択されており、基礎を押さえつつ、実務活用を見据えた段階に入りつつあることが読み取れます。

講師に挙げられた質問についても、質問の多くは、生成AIの基本的な仕組みを確認する内容でありながらも、自社業務への適用や運用方法を前提としたもので、会員企業が実用フェーズへ進み始めていることを感じさせるものでした。

### 今後

今後は、クラウド型LLMとローカルLLMを用途に応じて使い分ける動きが一層進み、特にローカルLLMへの注目が高まると想定されます。AIエージェントの活用が進展しトークン数が増加する中で、従量課金によるコスト増を懸念し、開発・運用環境の見直しを検討する企業も増えている状況です。

本委員会では、こうした動向を踏まえ、会員企業の実務に役立つ生成AIセミナーを今後も企画していきます。

### SDx プラットフォーム委員会

国内メーカーによる自社のみでのSDx移行は極めて困難であり、組込みソフトウェアベンダーとの戦略的協業が不可欠である。本委員会は、産官学の連携により業界横断的な再利用を可能とする共通プラットフォームの構築を推進する。あわせて、SDxの普及による「人月依存型ビジネス」からの脱却と、高付加価値なビジネスモデルへの変革を視野に入れ、業界全体の競争力強化に取り組む。活動概要は以下の通り。

①日本の製造業全体が利用できる共通SDxプラットフォームの企画、開発、標準化をビジョンに掲げ産官学が連携したアクションプランを設計する。②メーカー、ベンダー、大学、経産省など、従来のJASAを超えた、新たな仲間づくりに取り組む。委員会には協会外から、幅広い有識者の招聘を目指す。③SDxプラットフォーム委員会の活動を、協会内外に発信し、認知度を高める。

### ナレッジサービス委員会

「人月ビジネス」から脱却し、高付加価値な「ナレッジ提供型サービス」への転換を支援する知見を蓄積・提供する。JASAレポートが掲げる「人月からの脱却」と「SDxによる新価値創造」、そしてJASA会員企業の持続的成長を実現するための実行組織として機能する。活動概要は以下の通り。

①「人月ビジネス」から脱却し、高付加価値な「ナレッジ提供型サービス」への転換を支援する知見を蓄積・共有する。②人月ビジネス中心の会員企業が、ビジネスモデル変革にチャレンジできる砂場を構築する。

### 統合AI活用型開発委員会

フィジカルAI領域の著しい進化に対応するため、エンドツーエンド(以下E2E)開発の知見を獲得する。JASAレポートが掲げる「人月からの脱却」と「SDxによる新価値創造」、そしてJASA会員企業の持続的成長を実現

するための実行組織として機能する。活動概要は以下の通り。

①AI技術を開発プロセスに統合し、効率と品質の向上を図るための研究・実証を行う。②個社単独ではチャレンジできない課題解決を目指し、ナレッジの共有を推進する。③委員会の活動を、協会内外に発信し、認知度を高める。

### ディペンダビリティ社会実装委員会

AI社会実装の品質保証をテーマに、一般社団法人ディペンダビリティ技術推進協会(DEOS)と連携し標準化を推進する。

## 新設委員会紹介

### 事業推進本部

